

中国に接して、環境問題を考える

大澤正治
(愛知大学)

最近、環境問題の重要なことは、自然環境と人間を一体として考えることから始めて、自然環境に対する人間のレゾナードトルの確認に辿り着くことだろうと考えている。そして、人類にとって永遠の課題である人間のレゾナードトルの答がわかれば、当然に、自然環境のことがわかり、人間が自然環境に対してどのように対処すれば良いのかわかることになるだろうと考えている。ということは、これまでに誰一人として答を見出すことができなかった歴史がこれからもさらに続き、即ち環境問題の答は当分、見つからないだろうし、そう簡単に見つからないであろう難しさを改めて知ることになる。

話を戻して、最初に言いたいことは、環境問題について、世の中、自然環境と人間を一体とする考え方に閉塞してしまうケースが多い一方、自然環境へ挑戦する我が姿に魅せられてしまうケースも多いのではないかということである。この二つの考え方をどのように繋げるかが大切である。平たく言えば、理科と文科を繋げる総合性が重要であるということである。授業では、「環境問題は一人では解決しない。色々な立場の人々が手を結ぶことが前提的に必要なことだ」と言っている。それだけ環境は大きいことを知らせたいとともに、総合的な対処が必要なほどに環境は多様であることを知らせたい。とくに、人間を中心に考えることが身に滲みている経済学にとっては、自然環境と人間を一体とする包括的なとらえ方には思った以上に難儀しているのが現状である。

二番目に言いたいことは、この二つの考え方をどのようにして移行させるかが大変に難しく、重要であるということである。環境に及ぶ負荷は波及的な連続性をそなえている。この連続性をとらえるために、地理的なスペース軸で環境を考える経験を我々は随分と重ねてきたが、移行すべき時期、時間の見極めも重要であると考えている。即ち、環境問題を時間軸でとらえることも重要であることを強調しておきたい。環境問題は、スペース軸と時間軸で立体的にとらえるべきである。

環境問題、あるいは環境の波及性は難解である。従って、ライフサイクル分析は注目されるものの、残念なことに、なかなか時間軸の考え方が入ってこない。

環境問題について時間軸でとらえることに配慮するならば、環境対策導入の順番が見えてくる。

中国は、環境問題の博覧会と言っていいほど、多様な環境問題が溢れており、環境政策の導入を待ち望んでいる。環境対策について、重みづけをしようとする時は、そのニーズは、これまでの多くは投入する資金等環境対策の主体側の事情（制約）によるものであった。実は、このような場合の答えは、単に種々の環境対策を並べて評価するだけでなく、主体の適性、合理性とを天秤にかけることを忘れてはならない。主体について工夫することで、意外と色々な環境対策が同時に可能となる場合が多い。

今、私が言いたいことは、そのような見地からの環境政策の順位づけではなく、環境対策が適切なタイミングであるかどうかの評価を純粋に行うことが重要ではないだろうか

いうことである。

中国に接すると、日本の環境対策経験を活かすべしとの考え方が一般的であるが、日本では効果がある環境対策が中国ではそれほど期待できないとか、導入が早すぎるというケースも見えてくる。日本の経験が中国に必要であるとは言い切れないケースである。中国独自の経験の積み重ねをひたすら辛抱よく待ち続けるべきであるというケースもある。地域の社会、文化あるいは自然環境に環境対策がフィットするタイミングかどうかのポイントである。とくに、地域規模の環境問題にそのようなことが該当する。

中国のエネルギー資源では、石炭が豊富であり、現在、世界の約 3 割を生産する世界最大の石炭生産国である。中国の一次エネルギー消費の約 3/4 は石炭である。ちなみに、米国では一次エネルギーに占める石炭消費の割合は約 1/2 であり、脱石油のテーマのもと、石炭が注目されているわが国においては約 1/4 である。

ところが、一般的に、その石炭は地球温暖化等様々な環境問題の原因となっていることが指摘されている。そこで、石炭というエネルギー (Energy) 資源と、経済 (Economy)、環境 (Environment) の 3 つの E をいかに調和させるべきかという課題について考えてみる。

どの E から考え方をスタートさせるかは重要なところである。豊富な石炭ありき、その現実を踏まえ、Energy から考え始めるべきである。豊富な石炭を利用する、このことが環境に、経済にどのように影響を与えるか考える。この場合、悪影響が錯綜するので豊富な石炭の利用を中止するのであれば、石炭はけして豊富に賦存するとは言えないであろう。中国の炭坑をみると、豊富さの意味の重さを感じる。悪影響を及ぼしても豊富な石炭をどう利用すれば良いのか、考えを循環させることが大切である。

石炭の利用は様々な環境への影響を及ぼすものの、石炭の利用が中国の多くの都市の経済をゆるぎなく支えていることは事実である。石炭なしでは中国の成長し続ける経済、とくに産炭地域は壊滅してしまう。石炭に依存するかぎり、産炭地域の環境はけしてよくなるのが中国の現状である。環境が良くなくとも、石炭が地域経済に根づいていることを考えると、簡単にエネルギー転換とは言えない。北京では、既に家庭で石炭を用いることを禁止している。北京が位置する社会の時と、産炭地域が位置する社会の時が違うことを認識すべきである。従って、石炭と経済の関係を考えながら、石炭の環境対策を考えて行くことが必要となる。脱硫装置をつけるために資金を投入すると、地域を循環すべき資金に影響があるようでは考え直さなければならない。脱硫装置は、わが国では誉められても、中国では誉められるものとは言いきれない。

このようなことを考え、中国の産炭地域を歩きながら、改めて石炭と経済の関係を考えると、次のことに気がつく。

わが国ではもう昔となってしまった石炭を家庭で利用している風景である。石炭と家計との関係も考えなければならない。この関係を考えると、別の石炭と環境の関係が見えてくる。

とにかく、環境については、多面的に考えなければならない。環境負荷の連続性を考えなければならない。石炭の利用を見直すことが、石炭燃焼に伴う大気汚染以外の環境対策に役立つかも知れない。このような時を経て、脱硫装置の価値をありがたく思う時が来るのかも知れない。そして、人々は生き生きと町を歩くことができるのかも知れない。

<本日の Topics>

1. 北京ではなぜ家庭用石炭利用にストップをかけられたか
2. 所得格差は、時の格差
～北京と産炭地域の違い
3. 所得の格差をかけたのぼる資源
～西電東送、西気東輸
4. 石炭の環境対策
～DeSox 対策から退耕還林へ
～人間の一つのレゾンデートル
5. もう一つの石炭がもたらす環境負荷
～北京の最近の風景を思い出しながら
6. 今、原点のエネルギーは、
～もう一度、中国におけるエネルギー選択を考える
～そして、人間の別のレゾンデートル



